
魔法少女みらくる ミノルン ♪

くぼた 允

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女みらくる ミノルン♪

【Nコード】

N84860

【作者名】

くぼた允

【あらすじ】

陵桜学園2年『白石みのる』はひょんなことから魔法の国の女王候補『小神あきら』に見初められ、「愛と正義の魔法少女」として活動させられる羽目に。はてさて『白石みのる』の運命やいかに！？

注

この作品は拙作『らっきー れっすん』の似非アナザーストーリーです。舞台はこなたたちが高校卒業した数年後の世界。白石以外

のキャラは陵桜学園で教師をしていたり、全然別の仕事をしていたりしますので、ご注意ください。『らっきー れっすん』と合わせて読んでいただくと、多少ですが分かりやすくなるかも知れません。また「らっきすた」とは別のネタ元が幾つかありますが、古いものがほとんどなので、分からない方は近所のお兄さんお姉さんにこっそり聞いてみてください。

えびそーど01

突然ですが。

陵桜学園2年C組白石みのあるには、誰にも言えない秘密がありました。

なんと、白石みのあるは愛と正義の魔法少女だったのです！

『魔法少女みらくる ミノルン』 オープニングテーマ

みっみっみらくる
みーのるんるん！
みっみっみらくる
みーのるんるん！

すーなおに好きと
言えない君に♪
勇気をだして！

みっみっみらくる
みーのるんるん！
みっみっみらくる
みーのるんるん！

クロコホルムと
拘束器具で♪

じゅ・ん・び・か・ん・りょ・う！

みっみっみらくる
みーのるんるん！

みつみつみらくる
みーのるんるん！

後は呼び出せ

廃院病棟♪

無・理・な・ら・拉・〇・れ！

みつみつみらくる

みーのるんるん！

みつみつみらくる

みーのるんるん！

気付けばそこは

薄暗い部屋♪

監き（以下、自主規制）

「らぶりー」

とある休日の日暮れ時。

隣町のケーキ屋『パティスリー』に突如出現した謎の怪人。

頭には顔のところが丸くあいた苺のマスクのような物を被り、顔は朱塗りで厳めしく、体には動き難そうな三角のショートケーキの着ぐるみを身に付けている。

「らぶりー」

これはそいつがさつきから耳障りに発している鳴き声だ。
滑稽な見た目に反して意外と良い声だが、いかんせん野太すぎる。

「夫は単身赴任中、私、独り寝が寂しいの……」等というけしからん主婦（二十八歳、ほし。あき似）の尾てい骨には響くかも知れないが、生憎俺には何の影響も無い。

「ケーキ男！ 覚悟しやがれ！」

ケーキ男（仮）とちよつと前から対峙していた俺は、右手のバトンに力を込める。

すると、その鏡餅や鯛の尾頭門松トド松十姉妹（？）といった、何だかお目出度い意匠が無駄にたくさん施されたバトンが眩い光を放ち出す！

「今だミノルン！ 必殺技だよ！」

「応っ！」

俺は足元から聞こえてきた甲高い声に力強く答え、バトンを両手に持ち直すと頭上に大きく振りかぶる。

「喰らえっ！ ミラクル・コケティっつと見せかけて能天幹竹割り！」

「らあぶりーっ！！」

葎の被り物部分に俺が思い切り降り下ろしたバトンをめり込ませたケーキ男が、一際響く重低音ヴォイスとともに爆発しドアの外へ吹き飛んでいった。

「よっしゃ！ これでほしの。きは俺のもんじゃあ！」

「何言ってるの!? でもとにかくやったね、ミノルン!」

そう言いながら、俺の肩にチョコレート色の猫にも兎にも見える
変な動物が飛び乗ってきた。

こいつの名前は「りょうおつき陵桜鬼」。

俺の相棒だ。

「あ、あのっ!」

突然後ろからかけられた声に俺と陵桜鬼が振り向くと、そこには
ピンク色の髪を両サイドで結んだ小柄な少女がいた。

表向きにはただの小動物であるところの陵桜鬼は、それを境にペ
ットモード。ようするに、喋らなくなった。

少女は一度深々とお辞儀をし、ぱつと頭を上げた後、話し始めた。

「ありがとうございますっ! さっきの変な人、あなたが追い払っ
てくれたんですね? あの人のせいで、閉店業務できなくて・・・
・・・私、怖くてさっきまでカウンター裏に隠れてたんですけど」

「え? ってことは、君、店員なのか?」

俺は思わずそう問い返した。

少女はどうみても小学生だったからだ。

「店員っていうか・・・えっと、ここ私のお店なんですよ」

『私のお店』。

なるほど、彼女はこの店の経営者の娘なのだろう。

こんな小さなうちから家の手伝いなんて見上げたもんだ。

「偉いな、君。．．．．．ところで、君に年の離れたお姉さんはいたりしない？」

いきなり何言っただと思われる読者諸兄もいるかも知れんが、これは人として当然の義務だ。

彼女の容姿から推測するに、もし姉がいれば相当ハイレベルに違いない。

これを機にお近づきにならずしてどーする？

「お姉ちゃん？　いますけど．．．．．」

ツキターー！

「え、えーと、君？　も、もし良かったら、そのお姉さん、お、俺に紹介してくれない？」

(．．．．．気持ち悪いよ、ミノルン)

陵桜鬼が少女に聞こえないよう、脳に直接語りかけてくる。
が、気にしないのが俺様クオリティー。

「それは構わないですけど、すぐにはちょっと。お姉ちゃん、結婚してから一緒に住んでいないので」

なんだ、結婚してるのか．．．．．なんて落ち込むと思ったら大間違いだぜベイベー！

結婚してる！　ってことはおそらく年上だろう。

大いにけっこーじゃないか！

なにせこの白石、三度の飯より年上の女性が大好物！

おまけに人妻．．．．．ああ、なんて官能的な響き。

ま、大好物つつつても実際喰ったことはねえんだけどよ。
ゲヘヘ。

(お下品！ 最悪だ！ なんでボク、こんな人の使い魔なんだろう・
・・・・・・)

俺の思考を読んだらしい陵桜鬼が萎れた耳を前足で押さえた。
人間に置き換えれば、さしずめ頭を抱えたつてとこだ。
本人的には真剣なんだろうが、端から見るぶんには小動物の愛らしい仕草としか思えない。

「うわわ、かわいい！」

案の定、少女も食いついてきた。

お姉さんのこともあるし、ここはもうしばらく会話して彼女と仲良くなっておくのが得策。

こいつ（陵桜鬼）はいいダシだ。

「気になってたんですけど、その子って兎さん？ それとも猫さん？」

小首を傾げながら軽く背伸びして陵桜鬼に顔を近づける少女。
必然的に俺との距離も近くなる。

(・・・・・・おおう)

こいつあやべえ。

近くで見ると彼女の美少女スキルが並みじゃないことが一層良くわかった。

ふんわり柔らかそうな髪、大きな瞳に長い睫毛、つやつやした小

ぶりな唇・・・・・・・・。

完璧！ こいつはパーフェクト美少女だ！

このまま素直に育ってくれば、十数年後にはパーフェクト美女が間違いなく出来る。

・・・・・・ちっ！　なんで後十年早く生まれてくれなかったんだ！？

それと後一つ難があるとすれば、薄くだが化粧していることだな。まあ最近じゃ小学生で化粧なんて珍しくもないが、少し残念だ。

将来の肌のことを考えればしない方がいいに決まってる。

これは後で俺が正しいスキンケアについて説いてやらねばなるまいな・・・・・・・・。

「みゃあ！　みゃあみゃあ！」

「あははっ！　猫ちゃんだったんだ！　うふふ、くすぐったい♪」

などと俺が考えている間に、いつ飛び移ったのか陵桜鬼の奴は少女の胸に抱かれ、あろうことがその美少女顔をペロペロしていやがった。

これがもし妙齢のお姉さま相手だったら、すぐさま酔潰けにして三年程寝かせた後、輪切りにして犬の餌にしてやるところだが、いくら将来有望でも彼女はまだ子供。

寛大な心で許してやることにする。

それに少女の笑顔はストライクゾーン云々はともかく、やはりもうしばらく見ている価値のあるものに思えた。

「そろそろ行くぞ。陵桜鬼」

「みゃあ………」

ひとしきり美少女と愛玩動物の戯れを堪能した後、まだ名残惜しそうなエロ獣けものを少女から返してもらう。

「また遊ぼうね。りよーちゃん」

そう言つて、少女が俺に抱えられた陵桜鬼の頭を一撫でする。
気持ち良さに目をつむる、焦げ茶の獣。

……この野郎、すっかりなつきやがった。

ちなみに、遊んでいるとき聞かれたので、陵桜鬼の名前は教えてある。

「りよーちゃん」などと呼ばれ、こいつはすっかり上機嫌だ。

「それと、はい。これあなたに。変な人を追い払ってくれたのと、お店を片付けてもらったお礼です」

そう言つて、少女が二枚の紙切れを差し出した。

「この店の、無料券です」

一人と一匹が遊んでいる間、手持ちぶさただった俺はケーキ男が暴れたせい（俺が爆発させたからって話もあるが、それは文字通り『気のせい』だ）で乱れた店内を整理した。

後で私がやるから、と少女は言ったが、何しろ彼女以外店員はおろか親御さんも出てくる気配がない。

どうやらこんな小さな子が一人で店の戸締まりをさせられている

らしいことに憤慨した俺が、陵桜鬼と遊ぶのを止めて手伝おうとする少女をなだめ、物の置場所だけ確認して勝手にやったのだ。

「本当なら今あげられれば良いんですけど、残ってるケーキもあんまり無いし……」

少女の言う通り、店のガラスケースに残っているのは弱冠形が崩れたような感じのシュークリームと、小さめのカップケーキが二つのみ。

改めて見ると、なかなかどうして、繁盛している店のようだ。

「それに、やっぱりあなたが気に入ったものを食べてもらいたいんです。その方が私も嬉しいし」

そうして照れたように笑う少女と差し出されたままの無料券。
……どうしよう。

少女は「お礼」と言っているが、俺はそんなもの貰える立場じゃない。

片付けだつて俺が勝手にやったんだし、そもそもその原因になったケーキ男。

実はこいつが現れたのも、元をたどれば俺……っていうか『俺たち』に責任があつたりする。

これでもし少女の笑顔の奥に、「ふふふ、新規顧客ゲット！」ってな気配が少しでもあつたら遠慮なく券をいただいて後で無料分だけケーキを貰い、もう二度と来なければいいだけの話なんだが、どうやら少女は純粋な好意で言ってくれているようだ。

正直、俺はこんな状況にすこぶる弱い。

基本的に性格がねじまがっている上に、人から感謝されることなんて滅多にないからどうしていいか判断がつかなくなるのだ。

そして動くことも口をきくことも出来なくなり、せっかく好意を

向けてくれた相手にも「なんだこいつ」と思われ、見放されてしま
う。

中学時代は特にひどくて、ただその分いろいろ学んだから、高校
に入ってからそんなことも減ってきた。

だけど苦手なことに変わりはなく、実際今もう思考停止しかけて
いる。

・・・早く、何か、言わないと。

「みゃっお〜ん！」

完全に固まりかけたその時、俺の肩に戻っていた陵桜鬼が一際大
きな声で鳴いた。

少女がもとも大きな目をさらに見開き、持っている券を落とし
そうになった。

驚かせちまったみたいで申し訳ない。

だがそれをきっかけにして、俺の体と頭の硬直も解ける。

(You、貰っちゃいなYO！)

・・・うるせ。

「じ、じゃあ遠慮なく貰うよ。あ、あ、ありがと、う」

我ながら情けないほどぎこちない動きで、少女から券を受け取っ
た。

「あつ、こちらこそどういたしまして！　なんだか難しい顔をして
たから、受け取って貰えないかと思っちゃった。えへへ！」

そんな俺を笑うでもなく、少女は至極嬉しそう。

・・・・・・良かった。

（ミノルン。貸し、1。にんじん1本ね）

わあってるよ！

だからいちいちドヤ顔すんのはやめろ！

「ところで、あなた高校生・・・・・・ですよ？ それ、制服ですか？ この辺りじゃ見たことない気がするけど・・・・・・」

俺と陵桜鬼が他人にはわからない言い合い（？）をしていると、少女がそこで初めて気付いたように言った。

「そう言えば、お互いまだ名前も・・・・・・はわわっ、私つてばもしかしてすっごく失礼!？」

突然慌て出した少女の様子が可笑しくて、俺は思わず吹き出しそうになった。

それをどう勘違いしたのか、少女はさらに慌てて話し始めた・・・・・・のだが。

「ごめんなさい！ 自己紹介遅くなっちゃったけど、私、小早川ゆたかです！ 高校を卒業した後、専門学校で洋菓子の作り方を勉強して、パティシエールやってます！・・・・・・あ。あと、今はこの店のオーナーです！ どうぞよろしく!」

一息にそう言いきって、ペコンと頭を下げる少・・・・・・い、いやちよつと待って？

ちよつと頭、整理させて!？

恐ろしいことに、彼女の話は俺の幻聴でも白昼夢でもなく、現実だった。

彼女は小学生ではなく、立派な社会人だったのだ。
失礼ながら、免許証と保険証を確認させてもらったりした。

けど、よくよく考えてみればそれほど驚くことでも無かったんだよな。

何故って、そりゃ他にも同じように「見た目と年齢のギャップが異常」な連中を何人も知ってたからに決まってるんだろ？

「ええっ！　みのるちゃん、陵桜生だったんだ！？　それじゃ私たち先輩後輩だね。ちよっと歳離れてるけど」

そんな訳で今は、彼女の自己紹介の衝撃から案外早く立ち直れた俺が、ゆたか『さん』からいろいろ質問を受けている最中だ。

お互い名乗ってから、呼び方も「ゆたかさん」「みのるちゃん」と、実年齢に沿った感じになっている。

「……………なんだよ？」

こー言っちゃなんだが、俺は歳上や目上の人間には敬語を使う、いたって常識的な神経を持ち合わせているのだ。

だってその方がお姉さま方に受けが良いからな！

（打算まみれだね。ミノルン）

「へー。それじゃゆたかさんも陵桜出身なんですか？」

「そうだよ」

陵桜鬼の脳内突っ込みは無視して、ゆたかさんとの会話を続ける。
念のため言っておくが、歳上とわかったからって、俺はゆたかさんをそーゆー対象として見ちゃいない。

だってやっぱり、中身より外見が重要じゃーないかつ！？

（この人最低だ！）

ええい、やかまし！

「ところでみのるちゃん。それ、今着てるのは陵桜の制服じゃないよね？ それによく見たら、なんか……もしかして、浴衣？」

ゆたかさんが何だかやけに俺の服装を気にしているが、まー分かってなくもない。

一見確かに制服っぽいこの服は、近くで見ると明らかにおかしいのだ。

まず上衣。

デザインこそ所謂「セーラー服」を模しているようだが、実はこれ、着物である。

極端に丈が短く、腰骨の下辺りまでしかないから浴衣とも違うが、まあ似たようなものだ。

そして上衣だけでは隠せない下半身を守るのが、桃色のミニスカート。

死にたくなるので考えないようにしていたが、改めてすごい格好だ。

とは言え、俺にも事情があって今はこの恰好でいざるをえない。

だから俺は、こんな時のために陵桜鬼と相談して決めておいた、

取っておきの言い訳をゆたかさんに披露した。

「これはコスプレなんです。魔法少女の」

………イタい。

いろいろイタいよ陵桜鬼！

やっぱ無理あんよ、この言い訳！

「へー、そうなんだ！」

だがゆたかさんは意外とあっさり俺の発言を受け止めた。

もしかしたら、そっちの趣味があるのかも知れない。

きつと、ランドセルと黄色い帽子がびっくりするほど似合つと思う。

ただそのわりに食いついても来ないから、単にその手の物事に寛容なだけの可能性もある。

おそらく、後者だろう。

何にせよ、俺としては心底助かった。

「それで………って、ああっ！？ もうこんな時間！？」

話の続きをしようとしたらしいゆたかさんが急に大きな声を出した。

壁掛け時計が目に入ったようだ。

俺も時間なんて気にしてなかったが、逆算するとずいぶん長くここにいたことになる。

もともと結構前に一度帰ろうとしていたことも思い出し、俺はゆたかさんに暇乞いを告げた。

「それじゃーゆたかさん。今日はこの辺で失礼します」

「なんだか引き留めちゃってごめんなさい」

ゆたかさんが申し訳なさそうに言うが、そりゃーある意味こちらのセリフである。

だが、俺の次のセリフはもう決まっているから、余計なことはいわない。

「……………今度はケーキ、食べに来ます」

「うん！ いつでもどうぞ！」

ゆたかさんの満面の笑み。

……………やっべえな。

思わず宗旨変えしちまいそうだ。

……………じゅるり。

（逃げて！ 騙されちゃダメだ、ゆたかちゃん早く逃げて！）

陵桜鬼！

おまえこそどさくさ紛れに「ゆたかちゃん」とか言ってんじゃねえぞ！？

ま、本人には聞こえねーけどな。

さて、ホントにもう帰ろう。

と、店を出ようとした所でゆたかさんがとんでも無いことを言った。

「券二枚あるから次は彼氏さんと来てね」

「いねえっスッ!」

「ええっ!? ごめんなさい!　みのるちゃんすっごい綺麗だから
てつきり……」

最後になんて言うんだこの人は!?

もしかして俺ってばそんな男好きに見えるのか!?

ええい、どーなんだ陵桜鬼っ!!

(い、いやミノルン。たぶんゆたかちゃんに悪気はないよ。さっき
言ってた通りなんだと思う。だいたい、キミ女の子なんだから。恋
愛対象が女の子なんて、普通あんまり思わないんじゃない?)

ああ、そーだったそーだった。

最近その辺ほとんど気にしてないから、忘れた。

「ごめんねみのるちゃん。もしかして気分悪くしちゃった?」

「いやぜんぜん。むしろ俺の方こそなんかいろいろごめんなさい。
……恋人はいないけど今度友達と一緒に来るんで、おいしー
の作って待っててくださいねっ!　そいじゃーまたっ」

「うんっ!　たっくさん作って待ってるよっ。りょーちゃんもっ」

「みゃおーん!」

そんなこんなでこの日、どー見ても年下なケーキ屋オーナー小早川ゆたかさんと出会った。

そしてこの出会いが、俺に取って夢のように素晴らしい素敵なお姉さまたちとのめくるめく邂逅に繋がって行くのだが、この時の俺にはまだ知るよしもなかった。

「……………適当なこと言っちゃダメだよ、みのる。まだゆたかちゃんのところから帰ってきて5分しか経ってないんだから」

「良いだろー別に。妄想は自由なんだから」

「そーかも知れないけど！ やっぱりキミには愛と正義の魔法少女としての自覚を持った行動を取って欲しいとだね……………ぐちぐちぐち」

うつわ、陵桜鬼が愚痴り始めた。

こうなると長いんだよね……………。

もう面倒だから今のうちにこのエピソードを終わりにしまおう。

それじゃ、終わり！

……………ん？

なんだ、その顔？

なんか文句でも……………って、何っ？

『お前は白石みのるじゃないのか……………？』

そ、そうだけど？

俺は『白石みのる』だよ。

ちょっと男っぽい口調で、ボランティアで魔法少女やっていて、綺麗なお姉さんが大好きな、十六歳の乙女ですよ。

・・・・・・は？

『違う』？

・・・・・・ちーがーわーなーいつ！

俺は真正正銘『白石みのる』っ！

「白石」は白い石、「みのる」は平仮名で『白石みのる』、間違いないってば！

・・・・・・え？ 何？

糸目？ 男！？

だから、そう！

そいつも確かに『白石みのる』！

だけど俺も『白石みのる』！

同姓同名なんだよ！

あいつB組！

俺はC組！

最初っからそう言ってるだろ！

えびそーど01（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございます。

本作はもともと拙作『らっきー れっすん』の一部分として書き始めたものの、話が逸れすぎて別のストーリーになってしまった話の成れの果てです。

「あらすじ」にいらんこと書いてしまったのももう少し続けてみようと思いますが、どうなることやらわかりません。
どうかあたたかく見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8486o/>

魔法少女みらくる ミノルン♪

2010年11月11日18時42分発行